

2012年4月23日「エルサレムの平和の祭典」東京大会
—サンレモ条約記念祭Ⅲ—

ヨーロッパ (ECI) よりのチャレンジ!

エルサレムの平和を祈る会 事務局長
東京中央メシアニック集会 牧師 横山 隆

日本初、国会議事堂で祝われたサンレモⅢ

4月25日、第3回目に当たるサンレモ条約調印記念祭が、ECIの皆様によって日本の国会議事堂内で、国会議員や議員秘書を集めて執り行われました。このように議事堂の内部で集中したイスラエル問題が論じられたのは、日本の憲政史上初めてかもしれません。この集まりは、数年前に開催されたロンドンの国会よりも多くの議員が集まったとサンデル師は述べておりました。それに先立つ23日には、「エルサレムの平和の祭典」が国会に近い都市センターホテルで午前、午後のセミナー、夜はホテルニューオータニで晩餐会が開催されました。「エルサレムの平和を祈る会」主催による、第1回目の集会で、会長は奥山実師、副会長は大久保みどり師、主講師は、J.ガウティア博士、T.サンデル師、D.アディオラ師で、残念ながらドイツからのH.エックハート師は来日されませんでした。都市センターホテルの会議場は満席となり、またホテルニューオータニの晩餐会にはイスラエル大使を迎え、大久保師の司会により、アーティストたちのイスラエルソングやタンバリンチームによる踊りを交えて和やかに執り行われました。そして多くのクリスチャンたちがイスラエルについて、ヨーロッパからの「良き知らせ」に、固唾を呑んで耳を傾けたのです。

サンレモ会議 (1920)

1920年のサンレモ決議の問題については、はじめシンガポールのG.アナドレイ師よりメールが入り、その内容はECI(イスラエルの為のヨーロッパ連合)の人々が来日したいということ、そして日本のホスト役を引き受けてくれないかという要請でした。これはわが国にとって近來にない歴史に顕われた神の御業を擁護する重要な出来事で、日本のクリスチャンたちに是非知らせる義務があると思っはみたものの、具体的にどのようにしたらいいのか皆目見当がつかず、NRA事務局長大久保みどり師に相談してみたところ、NRAの評議委員会が近日中にあるので、ここで報告をしてくださいという御指示をいただき、急遽委員会に出席させていただいて、説明する機会を与えられました。

その時、村上好伸先生率いるNRAが協賛してくださるとい喜ばしい応答をうけ、スタートいたしました。それがサンレモ記念祭の約2ヶ月前の出来事でした。そして文献を探して小論文にまとめ、「ハーザー」誌に緊急提言として掲載させていただきました。これが今回の「サンレモ エルサレムの平和の祭典」の発進となりました。NRAの協賛を心より感謝いたします。その後、親イスラエルの団体である「シオンとの架け橋」や「シオンの喜び」も協賛してくださり、大きな飛躍の発端となりました。

アメリカの財政赤字で世界が困惑し、ヨーロッパも経済状態がなかなか立ち直らない、その中でイスラムによる反ユダヤ勢力は全ヨーロッパに、そしてアメリカをも侵食しています。そのような中ECIと呼ばれる親イスラエルで霊的なクリスチャンのリーダーたち、合法的に異邦人諸国のアンチイスラエルの政治勢力を親イスラエルに変えようとする従来とは異なるタイプのリーダーたちが来日しました。彼らは全世界の政治家たちをイスラエルに目を開かせる、プロフェッショナルなクリスチャンの戦士たちでありました。日本のクリスチャンたちにとっても、イスラエルの土地に関する考え方は様々であり、一定した見解は存在しませんでした。おそらくキリスト教会の大部分は、イスラエルの政治的立場を認めることに対して疑問を持っているのです。その理由は、マスコミや、人権擁護団体による親パレスチナ寄りの報道にあり、おおよそ聖書からかけ離れた試行錯誤を余儀なくされていると考えられます。第一ヒューマニズム(人道主義etc.)というものは聖書の世界には存在せず、異教としてのギリシャ哲学から由来しているので、これを正当な釈義の基準として中東問題、特にエルサレムの土地に関する問題を評価することはできません。

.....

次号に続きます。

2012年4月23日「エルサレムの平和の祭典」東京大会
—サンレモ条約記念祭Ⅲ—

ヨーロッパ (ECI) よりのチャレンジ!

エルサレムの平和を祈る会 事務局長
東京中央メシアニック集会 牧師 横山 隆

—第2回目—

審判の下にある世界

現在世界は、火薬庫に点火寸前の状態にあります。パキスタンは今、反米・反イスラエル勢力となり、中国、イラン、パキスタンという三カ国の枢軸関係ができつつあり、その背後にはロシアが控えています。イラクもまたイランの政治の影響下におかれようとしています。中東から北アフリカに至る全体が「アラブの春」によってますます反米・反イスラエル勢力となりつつあり、これはオバマ大統領の失政によるものと言われていています。またイスラム勢力によるヨーロッパの国々への侵攻は、反ユダヤ的危険性を増大しており、全世界がエルサレムという重い石に手をかけようとしています(ゼカリヤ 12:3)。欧米が疲弊しているこのような時、ECIのメンバーが敵対勢力をものともせず、イスラエルの土地問題を大胆に、国際法の角度からの合法性を訴えるために来日してくれたことは感謝にたえません。ECIの侍たちに心よりありがとうございますと言いたいと思います。我々クリスチャンはもう一度、謙虚にECIが掲げる目標に対して目を開いて見るべきです。

神が諸国を審判する基準 とは?

1. 聖書に記された啓示としての聖書の時代は終わっても、いまの時代は同一の時間空間の延長上にあることは間違いないのです。ゆえに、いま生存している私たちは、イスラエルと神の契約を今でも取り消されることのない継続された契約としてとらえ、旧約預言者たちが警告した言葉に耳を傾けなければなりません。
2. イスラエルは神の「瞳」であるので、これを攻撃することは、神に対する挑戦に等しい(ゼカリヤ 2:12)とゼカリヤは警告しています。
3. 全世界の諸国民は、神による審きを体験します。その究極的度量計は、異邦諸国が神と契約の民イスラエルに対して、どのように振る舞ったかが基準となる(ヨヨエルは記しており、イナゴは神の審きであると警告しました。

4. エルサレム問題は、全世界の民にとって好むと好まざるとにかかわらず、終わりの時、明暗を分けるずっしりと重い試金石となる(ゼカリヤ 12:2~5)と、ゼカリヤはエルサレム問題を預言しました。

封印は開かれた

サンレモ会議の重要性を認識していたのは、米英仏伊日の5カ国の政治家だけだったのでしょうか?全ての諸国は妬みを起こさせるため、イスラエルの行く先を見守り、これを支持し、祈らなければならない務めを有しています。「励ます」という言葉(ロマ書 11:10)は、いま激動の波に飲み込まれつつあるイスラエルを強力に霊的に物質的に支持することであり、残念ながら教会は長い間この「励ます務め」を放棄してきました。ゆえに審かれるのです。異教も同様の理由によって審かれます。英国の公文書保管庫の中に長い間眠っていたサンレモ会議の資料が公になり、これがネット上で閲覧されて初めて、世界はイスラエルの土地に関する正当な権利を知り、封印が開かれました。これは終わりの「しるし」であり、メサイアの再臨がカウントダウンされ始まったことを正確に意味しています。また日本の外務省公文書資料館のサンレモ会議の最高会議総括報告がネット上で公式に閲覧できるようになり、これを誰もが見ることができます。イスラエルは、聖書的には神との契約を土台として、現在のエレッツ(地)イスラエルを領有しており、またそれとは別に、国際法上においても正当な権利を有する国家として、現在のイスラエルの土地を領有しているのです。これは極めて重要であり、聖書の信憑性を裏付けるものとなります。ECIメンバーのJ.ガウティアー博士が20年にわたる国際法の研究成果をまとめて、一冊の分厚い本として出版しています。



次号に続きます。

2012年4月23日「エルサレムの平和の祭典」東京大会
—サンレモ条約記念祭Ⅲ—

ヨーロッパ (ECI) よりのチャレンジ!

エルサレムの平和を祈る会 事務局長
東京中央メシアニック集会 牧師 横山 隆

—第3回—

「サンレモ会議」とは、初めて聞いた私にとってはまったく見当もつかない未知の世界の言葉であり、これをネット上で調べてみると、日本の外交史上、聖書の預言的的角度から見て極めて重要な、そして想像できないようなことが既にあったことを認識せざるを得ませんでした。日本政府は既に92年前、イスラエル独立の布石となったサンレモ条約に国際法にのっとり、世界の5大国としてアメリカをオブザーバーとして正式に調印していました。しかも、このような機会が訪れる時代背景としての確率は、ほんの一瞬にすぎませんでした。これは主の再臨前の世界が頭をもたげて、イスラエルのメシアを全世界の王として、その到来を待ち望む体制が正式に準備段階に入ったことを意味していたのです。またサンレモ会議の約定調印は、終末の時に何らかの意味をなしているはずであります。

神の風によって復活した エレツ (土地) イスラエル

イスラエルの土地に関する諸国民の領有の妥当性についての評価は、そのほとんどがパレスチナ側に同情的でありました。ここにはイスラエル独立の数十年前から存在していたパレスチナの土地の国際法上の決定事項が、長期間にわたって故意に全世界に対して隠蔽され続けた疑いがあります。イスラエルが紀元後70年に亡国の民となって以来、約1900年ぶりに建国するに当たり、諸国民がこれにかかわった歴史を検証してみると、神の指によって1920年に吹いた一陣の風という奇跡的介入があったことは明らかです。世界の歴史の中で、国を失って後1000年以上経過した民族が国を再興させたためではなく、旧約聖書の中心民族であるイスラエルが1900年ぶりに国を再建させたということは、聖書の歴史が現在に至るもまだ完結しておらず、その途中であることを明示しています。神によって靈感を受けて記述された聖書の啓示は終わっても、時間と空間の連続性は終わっていないのです。それは連続と持続しているものであり、すなわち聖書に記載されている世界と今の世界はつながっており、メサイア・イエスの再臨を待ち望んでいるのです。

—サンレモ以後の歩み—よろめく日本

イスラエルという土地は、神との契約の中で「聖なる地」とならなければ、その民は土地から吐き出される約定になっていました。第一次世界大戦後イスラエル建国の土台となるサンレモ条約に署名した当時の大日本帝国は諸外国にとっては奇跡的な国であり、数百年間も続いた封建社会と鎖国から脱却して明治維新を成し遂げ、半世紀も待たずに世界の5大国へと駆け上ったということは、世界史の謎とされていました。1920年から3年後の1923年8月17日には、残念ながらアメリカ主導によって日英同盟が破棄され日本は独自の道を歩み始め、大陸に進出することによって対米戦争への道を突き進み、第二次世界大戦においてはナチスドイツと軍事同盟を結ぶという大失態を演じてしまいました。なぜ松岡外相はナチスドイツと同盟を結んだのでしょうか?それは当時の大日本帝国には政治家に物申すことのできる預言者が不在だったからであり、中国をいともたやすく植民地化しようと考えたことにも起因するのです。第二次世界大戦(日米戦争)で大敗北をした日本は自己中心性を深く悟り、物量総力戦の身の丈に合わない戦など、決してしてはならないことを心底悟ったと思われるし、また日本は第一次大戦後にイスラエルを支援して、その後第二次世界大戦においてドイツと軍事同盟を結んだ後においても、リトアニア総領事杉原千畝氏によるビザ発行や満州にユダヤ人国家を建設しようとした樋口大佐などの軍人たちがいたことは、不思議なことでありました。1920年1月に「国際連盟」が設立されましたが、同年4月25日までは5大国に全権が委ねられていました。その数ヶ月間という一瞬こそが、イスラエルにとって1900年に及ぶディアスポラに終止符を打つ絶好の機会、すなわち神のときだったのです。このように日本は、サンレモ会議であまりにも重要な布石を打ったので、霊的敵対勢力が恐れをなし、その後連合軍と戦火を交えて敗北したことにより、そのすべての誇りは取り払われたと思われる。しかしドイツと同盟した日本は、ドイツの要請であるユダヤ人迫害やユダヤ難民をドイツに引き渡す事などは毅然として断固断ってきました。

—次号に続きます—

2012年4月23日「エルサレムの平和の祭典」東京大会
—サンレモ条約記念祭Ⅲ—

ヨーロッパ (ECI) よりのチャレンジ!

エルサレムの平和を祈る会 事務局長
東京中央メシアニック集会 牧師 横山 隆

—最終回—

戦後の日本人の世界観は急変し、アメリカというサンクラスをかけてしか世界が見えなくなってしまう、物や文化社会の価値も著しく変じ、第一次世界大戦時に見えていたものも第二次大戦後には見えなくなりました。日本民族の豊かな文化伝統、また武士道もことごとく擦り切れてしまい、アメリカ的になり、しかも日本は歴史上初めてアメリカの植民地的国家となつて67年間も歩み続け、あと3年で2015年、戦後70年目の到来します。ここでアメリカという宗主国から脱出(Exodus)できなければ、この国にとって取り返しのつかなくなる大きな不幸を招く結果となるでしょう。

日本にしかない賜物とは何か?

私は日本という国がアジアのキリスト教会に対して発進すべき、この国に与られている賜物的な使命のリアティーを感じるのです。それは聖書的にイスラエルを支援する事、すなわち神の雄偉さを推進することによって日本民族に与えられている神よりの召命です。召命を受けた一つのしるしは、日本が1920年にサンレモ会議で条約調印したことにはっきりとあらわれているのではないのでしょうか。日本はアジア民族の中で唯一ヨーロッパの列強国と共に中東の土地問題の線引きに参画し、イスラエル建国の礎となりました。この出来事は偶然ではなく、贖いの中心地エルサレムを回復させるために、神が昔から計画しておられた、この国の重要な「意味」(隠された宝)が、終わりの時代にあらわれた日本の光でもあります(詩編119:130)。

リバイバルとはイスラエルに由来し、帰結する

リバイバルという言葉が聖書に出てくるのは、私の記憶ではVヤク書と詩編です。

「主よ、あなたの名声をわたしは聞きました。主よ、わたしはあなたの雄偉さに畏れを抱きます。数年のうちにも、それを生き返らせ、数年のうちにも、それを示してください。」(新共同訳Vヤク3:2) revive thy work in the midst of the years.」(KJV/Vヤク3:2)。

「再びわたしたちに命を得させ、あなたの民があなたによって喜び祝うようにしてくださいませんか。」(新共同訳詩編85:6~7)

Wilt thou not revive us again: that thy people may rejoice in thee? (KJV 詩編85:6~7) 」

「あなたの民」とは、選民イスラエルを指しており、これがリバイバルの目標としての出展であります。これら2つの御言葉は、文脈的にイスラエル、ユダヤ文脈から出てイスラエルに対して語られているのです。

聖書に記されているリバイバルの98%以上は、イスラエルに関する信仰復興であり、後の2%くらいが異邦人のリバイバルです。ヨナのリバイバルも二つで起こっており、主イエスは「これは「しるし」である」と言われました。聖書の文脈をイスラエル抜きで異邦人教会中心に考えたとき、リバイバルという言葉は「空ろ」に響き、従来のメガチャーチ指向の大教会、大人数優先の「リバイバル論」が生まれます。これは果たして聖書的か否か? 考え直す必要があります。できるだけ多くの人が信仰を持つべきであることはいまでもないことですが、人数が先行するリバイバル論を繰り広げるならば、他宗教、新興宗教の数は到底及ばぬのが日本の現実です。「それは終わりの時に向かって急ぐ(Vヤク2:3)」とイスラエルより発進され、イスラエルに向かって語られた御言葉が、リバイバルを来たらせると記した預言者の警告でもあるのです。

後日談

4月23日の「イスラエル平和の祭典」はECIのメッセンジャーたちにより、日本のイスラエル問題に対して、内外に一石を投じました。ホテルニューオータニで開催された晩さん会にいられた主催のイスラエル大使ニシム・ベントリット氏から、終わりに感謝の言葉があり、これから「サンレモ」について大いに語らせていただきますと笑顔で喜びの謝辞を述べられました。それから1ヶ月後5月21日(月)新宿オペラシティセンターにおいて、イスラエル大使館主催の東京フィルハーモニーによるオペラ(イスラエルから3人のオペラ歌手が来日)とレセプションがイスラエル建国64周年、イスラエル・日本国交60周年を記念する旨の招待状があり、参加させていただきました。当日は皇族も来ておられ、盛大に執り行われました。ニシム・ベントリット大使は冒頭、御挨拶の中で「日露戦争のとき、日本に対して戦費を調達してくれたユダヤ人ヤコブ・シフ氏の話の後に、日本・イスラエル国交開始60年目にして人々に顕された「サンレモ会議」という日本とイスラエルの不思議な「絆」となった1920年の日本の重要な働きについて語られました。多くの人々にとっては、これは初めて聞く日本の誇りであったと思います。大使秘書が私にそっと語ってくれました。大使は「サンレモ」について4月23日の晩さん会以来、多くの人々に語っておられますよということでした。これは「エルサレム平和の祭典」の後日談です。イスラエルの神の御言葉がエルサレムに平安を、そしてイスラエル全家の救いを速にお与えくださいますように。